

## 平成 21 年度ミクロネシア連邦報告

多島圏研究センターは平成 21 年度教育研究高度化のための支援体制整備事業「国際島嶼・環境・医学教育研究支援プロジェクト」をもとに平成 21 年 12 月 3 日から 12 月 16 日までグアム大学、ミクロネシア短大、ミクロネシア連邦チューク州・コスラエ州・ポンペイ州政府等を訪問し、今後の教育研究に関する協力体制について打合せを行いました。

打合せには多島研専任教員 4 名と兼務教員 3 名が参加しました。参加者の各専門分野からミクロネシア連邦コスラエ州を中心に現地の現状について報告します。

### コスラエのリーダーシップとキリスト教

桑原 季雄  
(法文学部)

ミクロネシア連邦を構成する 4 州の 1 つ、コスラエ州は、人口 7,700 人 (2000 年)、面積 116km<sup>2</sup> の小島である。島の 70% が山で、4 つの自治区に分けられ、東岸のレロ村が行政の中心地である。すべての村は海岸部にあり、大半が自給自足的な農業と漁業に従事している。島民は全員キリスト教徒であり、カトリック系 1 つと 12 のプロテスタント系宗派に分かれる。1800 年代後半に島全体が伝染病に襲われたという経験から、人々は当時

のキリスト教宗派に対し絶大な信頼を置くようになったという。

コスラエの首長制についてみると、ヤップ州と違って伝統的な首長制は存在しない。州知事をトップに、州代表の国会議員が 2 名、4 つの村の代表であるメイヤーが 4 人いる。その他、島の 13 のキリスト教会に 1 名ずつ教会リーダー (church leader) が存在し、各村には青年会や老人会、婦人会があり、各々リーダーがいる。中でも教会リーダーの影響力が最も大きく、過去にはメイヤーや国会議員を兼ねることもあった。また、過去にはアメリカ人宣教師が熱心に宣教した歴史があり、それがコスラエの伝統文化や伝統的首長制を消滅させたようだ。こうした教会の影響は、どの村もゴミがなく清潔に保たれているという島民の衛生観にも見て取れる。毎週土曜日は村の清掃日になっていて、どの村でも総出で美化作業を行っている。教会は島のすべての局面に深く関与しているのだ。

一方、近年の傾向としては、開発をよしとせず、伝統的なものを大事にする気運が強まっている。タロやヤムなどの伝統的な食物の大切さを学校や教会、家庭でも強調するようになった。このように、キリスト教会の圧倒的な影響の下で、衛生といった西欧的価値

観の浸透ばかりでなく、伝統的なものの見直しや復権も静かに進行しているようだ。



コスラエのキリスト教会

#### コスラエ州およびポナペ州の自然と農業

富永 茂人

(多島圏研究センター)

コスラエ州は地理的位置のせいか、観光産業等が少なく、荒れていない、自然豊かな島であった。自給的農業が主体と思われ、多くの家庭で多種類の野菜の袋栽培や畝立て・支柱栽培が見られた。果樹ではバナナ、ヤシの他、カンキツ類が各家庭の周囲に植えられており、放任的なカンキツ園も散見された(写真)。特に、‘コスラエタンジェリン’(写真枠中)という、緑～黄色の果皮で扁平・無核・低酸で日本人好みの味のカンキツが各家庭で栽培され、結実していた。このカンキツは種子繁殖ができないので、繁殖法は取り木あるいは芽接ぎによるということであったが、おそらく取り木繁殖が主体と思われた。1994年のポナペ州調査でも町の店で販売されていたが、コスラエ州からの持ち込みでポナペ州では栽培できないということであった。コスラエ州の人は、信託統治領時代に日本から持ち込まれたと言っていたが、日本にはこれと同じカンキツは無い。また、ウンシュウミカンらしきものは別に存在した。‘コスラエタンジェリン’がどのようなカンキツであるか、今後のDNA解析が期待される。その他に、ライム類、スイートオレンジ類、サワーオレ

ンジ類が認められた。ポナペ州は都市化が進んでおり、農業は、15年前に比べて、特に山岳地帯での衰退が著しく、グローバリゼーションの影響が大きいものと思われた。カンキツ類ではライム類、サワーオレンジ類、マンダリン類が認められたが、その利用は限られているものと思われた。



コスラエ州のカンキツ園と  
‘コスラエタンジェリン’

#### コスラエの言語状況

梁川 英俊

(法文学部)

ミクロネシア連邦の公用語は英語であるが、各島にはいままなお独自の地域語が残っており、同じ地域語を母語とする者同士の会話は原則として地域語で行われる。英語が必要になるのは異なった地域語を母語とする人々が会話する場合で、たとえばポンペイ語話者とチューク語話者の会話は英語で行われる。あるいは同じチューク出身者であっても、言語的に大きく異なる環礁外の島人と環礁内の島人の会話は英語である。学校では小学校3年までは地域語の読み書きが教科として組まれ、授業も原則として地域語で行われる。もっともそれはあくまでも原則で、異なる州から来た教師が教える場合などは、4年生以下であっても英語の使用頻度が高くなるという。参考までにミクロネシアの教育制度は小学校が8年、高校が4年である。今回の主要

な調査地であったコスラエでは、ボンベイやチュークに比べて日常的に英語を耳にする機会は乏しかった。調査の協力者でも、高校卒業以上の学歴を持つ人でアンケートの英語を現地語通訳なしで理解できた人は、学校の教師など日常的に英語と接する機会の多い一部のみに限られた。こうした英語力の低さは、一島で一州をなし、言語の異なる離島をもたないコスラエの地理的特性によるところが大きいと思われるが、他州に比較して新聞等の英語による印刷物に接する機会に恵まれないことも一因だろう。

ミクロネシアでは基本的に「書きことば」は英語であり、「話しことば」は地域語である。地域語の「書きことば」としての使用は、小学校低学年でその基礎を習うが定着しておらず、個人レベルでスペルが異なることも珍しくない。ちなみに今回の調査で訪れた3州のうち、街中で地域語の表記が最も多く目についたのはチュークであった。



コスラエ語のポスター

## コスラエ報告

長嶋 俊介  
(多島圏研究センター)

山岳中規模(100 km<sup>2</sup>, 8000 人)単独島である。気候変動への危機意識が高く、かつ環境保全運動展開での政府イニシアティブが優れている。生活環境での清潔度も良好。袋に土の野菜家庭菜園は、熱帯・多雨域として稀な

成功事例で他太平洋島嶼域への普及が期待される。地域が均質的な近代化を遂げ、位階性残滓は強固でなく、敬虔な宗教社会で、社会的安定感もある。消費経済も過度でなく、持続可能生存 sustainable subsistence 経済との両立度も一定の水準にある。ただ孤立島特有の廃車処理問題があり、国際連携での措置が求められる。またナンマドール(ポーペイ州)と比肩される世界的価値のレル遺跡の保存修復や文化財展示に工夫の余地がある。太平洋島嶼の未来モデルを考えるに好適な中規模島である。



レル遺跡

## ミクロネシアのタコノキ属植物

宮本 旬子  
(理工学研究科)

ミクロネシア連邦において環境保全や在来植物の利用に係る研究者等との情報交換をおこなった。特に、タコノキ科(Pandanaceae)タコノキ属(*Pandanus*)について重点的に情報収集をおこない、自生状況および栽培利用について現地調査を実施した。本属は熱帯を中心に約600種が分布している。ミクロネシアおよび周辺諸島では、主に沿岸部に広域分布種である *P. tectorius* が生育し、その外果皮は食用として利用されている。また、各島の主に内陸部には複数の固有種が分布しているほか、稀に島外から持ち込まれた可能性がある分類群が民家等に植栽されている。日

本では、琉球列島に広域分布種のアダン (*P. odoratissimus*) が、小笠原諸島に固有種のタコノキ (*P. boninensis*) が自生し、2009年に大東諸島産ホソミアダン (*P. daitoensis* Susanti & J. Miyam.) が新たに記載された。タコノキ科の中で最も高緯度地域に分布するこれらの日本産分類群の体系学的位置は明確でない。タコノキ属には海流散布を主とする分類群が多く、日本産分類群の起源や進化系統を検討する上で、東南アジアと並んで、ミクロネシアおよび周辺諸島の分類群との比較研究が不可欠である。今回の訪問を機に面識を得た現地の研究者等との情報交換を今後も継続し、本属の分布の辺境である日本の分類群と、多様性のホットスポットであるインド洋から太平洋海域の島々の分類群との関係の一端を明らかにしていきたいと考えている。



コスラエ島の *Pandanus*

#### 蚊の発生源としての廃棄物

野田 伸一

(多島圏研究センター)

デング熱は熱帯・亜熱帯地域で流行するウイルス感染症で、ヤブカ属の蚊によって媒介される。近年、ミクロネシア連邦でも流行が起きようになってきている。デング熱ウイルスはヤブカ属のネッタイシマカやヒトス

ジシマカによって媒介されるが、地域固有種も媒介者となる。ヤブカ属の蚊は小さな容器から発生する。以前はヤシ殻などが発生源であったが、最近は家屋周辺に放置されたプラスチック容器や空き缶が主要な発生源となっている。島嶼地域ではごみ処理が問題となっているが、消費に伴って廃棄された容器から病気を媒介する蚊が発生していることも認識しておく必要がある。特に重要な蚊の発生源として放棄された古タイヤがある。小さな容器では乾燥して幼虫が死滅することがあるのだが、古タイヤの内側に溜まる水の量が多く、また内部は日光が当たらないことから非常に安定した蚊の発生源になる。今回の調査地においても放置された古タイヤの内部に蚊の幼虫が生息していた。



放置された古タイヤ

#### ミクロネシア連邦コスラエ島のサンゴ

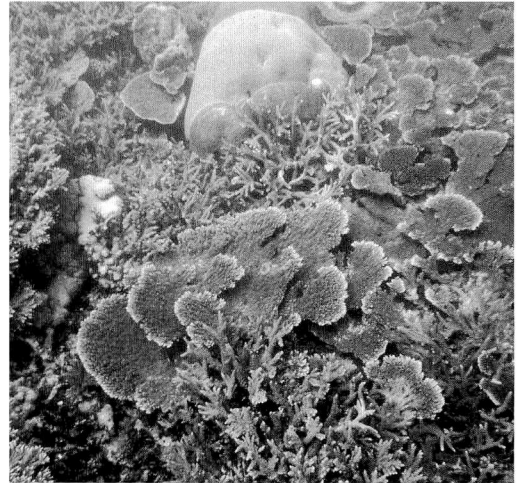
河合 溪

(多島圏研究センター)

ミクロネシア連邦コスラエ島東部においてサンゴの状態の目視観察とサンゴへの被害に関する聞き取り調査を行った。干出時に観察できる場所にはほとんどサンゴは観察されなかったが、水深1 mぐらいまでは長径10 cm前後のサンゴが観察され、最近になりサンゴの成長が始まったと考えられる。水深4-5 mのところではテーブルサンゴや枝サンゴが数mぐらいの大きさで観察され、長期間での成長が続いていると考えられる。太平洋域で



エルニーニョが起こった1997年－1998年は、この地域の水温は通常より低下し、サンゴの被害はほとんどなかった。一方、2004年は島の北東部で白化現象が起き、その時は水深10mぐらいまでほとんど白化でサンゴは死んだが、現在は小さなコロニーとして復活しだしている。また、2008年は小さな津波が来てサンゴに被害を与えた。水深4－5mに数十cm近くの魚影も観察されたが、深いところのサンゴが良い状態にあるのに比べ、あまり魚の個体数が多いようには思われなかった。これは住民によるオーバーフィッシングの影響と指摘された。



コスラエ島のサンゴ

## 多島圏研究センター研究会発表要旨

第100回 2009年10月19日  
ケルト学とは何か？

原 聖

(女子美術大学教授)

ピエール＝イヴ・ランペール

(フランス国立高等研究院教授)

ケルト学は19世紀に西ヨーロッパで生まれた学問で、最初は「ケルトマニア」に対する反動として登場しました。ケルト学がカバーする領域は考古学、歴史言語学、文学史、さらには方言学、フォークロア等々、多岐に及びます。これらの学問分野のそれぞれが、時代と場所に依拠して、ケルト人の一側面の解明に寄与するのです。ケルト学はこの多様性のため、人文諸科学の全体に目配りしなければなりません。たとえばある種の考古学者や言語学者が今日「ケルト人」という概念を使うことに難色を示しているとはいえ（「ケルト懐疑主義」です）、歴史のなかで、また現代においてもなお、「ケルト」という紛れもない現実があるということは動かしがたいことであり、最も重要なことは、アイルランド、ブルターニュ、スコットランド、ウェールズにおいて、現代のケルト文化がいまなおそこ

にあり続けているということなのです。

第101回 2009年11月16日  
南西諸島のさとうきびと新制度

坂井 教郎

(鹿児島大学農学部)

鹿児島県から沖縄県に連なる南西諸島では、長年、多くの島々でさとうきびが栽培され、粗糖（白糖の原料）や黒糖が製造されてきた。さとうきびはその島の「基幹作物」と言われ、これまで島の農家の所得を支え、島社会を維持する役割も果たしてきた。

このさとうきび作は、一連の農政改革の流れの中で、2007年から「品目別経営安定対策」の対象となった。この新制度の意図は、さとうきび作の生産コストの低減を進めることで国民負担を減らすとともに、さとうきび作の担い手を育成・確保することとされている。新制度の下では、さとうきび農家が従来通りの収入を得るためには、政府が定めた要件を満たす必要があり、南西諸島のさとうきび生産は現在、大きな変革を迫られている。

本報告では、南西諸島におけるさとうきび

の現状とさとうきび・製糖の制度的な仕組みを述べるとともに、新制度の影響やそれに対応する島の取り組み・課題等について考察を行う。

第102回 2010年1月25日  
太平洋諸島での漁業管理：漁業資源は太平洋  
島民の“生命線”でありえるか？

Vina Ram Bidesi

(University of South Pacific, 多島研)

The 22 developing states and territories of the Pacific Islands region consist of only about 551,390 km<sup>2</sup> of land spread across 30 million km<sup>2</sup> of ocean that extends from north to south of the equator. The islands are linked and controlled by the marine environment.

The dependence of the Pacific Island countries upon the ocean resources has been a vital part of their cultural, social and economic development. The coastal and marine ecosystems of the region are extremely important habitats for sustaining the livelihoods. With limited arable land and poor soils in the low-lying islands, reliance on marine resources is extremely important. As the population

increases, this dependence becomes even more critical. The ocean is seen as the ‘lifeline’ that “provides the greatest opportunities for economic development” (SPREP 2002). Economic activities such as fisheries, tourism and trade are highly dependent on the marine environment.

The seminar will focus on the critical dependence of Pacific Islanders on the fisheries resources, to show that while there has been much progress towards the management of fisheries, the question still remains whether the sector can continue to be the ‘lifeline’. Using examples and research experiences influenced by social, economic and environmental policy perspective, policy gaps and future research interests are indentified. The nature and structure of the fisheries sector will be described and policy initiatives will be outlined to show that two parallel systems exist. While there are attempts to achieve a more integrated approach, fisheries management and development goals will still not be achieved unless the design of an effective fisheries management regime is considered for both coastal and offshore fisheries.

---

## 最近の出版物

---

南太平洋研究 (SOUTH PACIFIC STUDIES) Vol.30, No2, 2010

Research Papers

TAKARABE M.: Missionary process of modern buddhism in Amami Oshima: on its propagation and missionary style

SHIMAUCHI M., KAMIWADA H., FUKUDA T., TSUDA K., SAKAMAKI Y., KUSIGEMATI K.: Effects of wind velocity on the catchability of a sex-pheromone trap for the common cutworm, *Spodoptera litura* (FABRICIUS)

KAWAI K., KUWAHARA S., ONJO M., NODA S., NISHIMURA A., TOMINAGA S., NAGASHIMA S.: The influence of environmental changes on the micronesia area: a case study of islands in Pohnpei state, Federated States of Micronesia

## お知らせ

多島圏研究センターは「多島域における小島嶼の自律性」というプロジェクトを現在行っています。

- 1) 研究拠点形成費等補助金（教育研究高度化のための支援体制整備事業）「国際島嶼・環境・医学教育研究支援プロジェクト」をもとに平成 21 年度は 12 月 3 日から 12 月 16 日までグアム大学、ミクロネシア短大、ミクロネシア連邦チューク州・コスラエ州・ボンベイ州政府等と、今後の教育研究に関する協力体制について打合せを行いました。



ミクロネシア連邦コスラエ州政府スタッフと参加者



ミクロネシア連邦コスラエ州政府での打合せ

- 2) 鹿児島県島嶼を対象にしたプロジェクト「豊かな島嶼の発展のために」を行っています。これは平成 21 年度鹿児島大学学長裁量経費をもとにし、多島圏研究センターがこれまで継続して行ってきた、南北 600 km に連続する鹿児島県島嶼域の研究「小島嶼の自律性並びに新・道の島々センサーゾーン拠点形成研究」の成果を積み上げ、さらに、その総括と社会への還元と貢献を目指すものです。

### プロジェクト参加者とテーマ

富永茂人（多島研）	島嶼農業の展開構造
野田伸一（多島研）	十島村の口之島と中之島におけるブユ対策
日高哲志（多島研）	パパイヤ果実の加工適性に関する研究
長嶋俊介（多島研）	三島・甌島諸島と鹿児島列島内（徳之島）における南北連続・不連続性調査
河合 溪（多島研）	奄美大島に見られる干潟の貝類の多様性
八田明夫（教育学部）	島嶼における有孔虫の研究
寺田竜太（水産学部）	奄美群島における海藻の利用 現状と課題
小針 統（水産学部）	奄美リュウキュウアユの保全にかかわる分析手法の確立
鳥居享司（水産学部）	奄美地域における漁業経営の実態分析
桑原季雄（法文学部）	与論島における地域活性化の取り組み
萩野 誠（法文学部）	交流圏からみた島嶼をめぐる情報フローについて
梁川英俊（法文学部）	奄美諸島におけるシマウタの伝承形態
西村 知（法文学部）	奄美マングローブ域コミュニティにおける水産資源管理

外国人客員教授として南太平洋大学から Vina Ram Bidesi 講師が着任しました。招聘期間は平成 21 年 12 月 24 日ー平成 22 年 3 月 27 日です。研究テーマは「The evolutionary process of coastal fisheries policy in Japan with the aim of drawing lessons for Pacific island coastal fisheries management」です。



研究会での Bidesi 博士

---

多島研だより No. 58 平成 22 年 2 月 24 日発行

発行：鹿児島大学多島圏研究センター

〒 890-8580 鹿児島市郡元 1-21-24

電話 099 (285) 7394 ファクシミリ 099 (285) 6197

電子メール tatoken@kuas.kagoshima-u.ac.jp

WWW <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html>

---